

「主の憐れみを知るから」
出エジプト記 32 章 1-14 節

イスラエルの民は、神さまによってエジプトから導き出され、神の民として力強く歩み出していくということになるはずでした。ところが彼らは、モーセが十戒を記した石の板を神様から受け取るために山に登っていた留守の間にとんでもない罪を犯してしまいます。彼らは十戒の第一戒と第二戒、すなわち「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。いかなる像も造ってはならない。それらに向かってひれ伏したり、仕えたりしてはならない」と戒められた律法を破り、金の子牛の像を造ってそれを拝むという罪を犯してしまったのです。

これに対して神さまは、「わたしはこの民を見てきたが、実にかたくなな民である」と言われました。これまで民のわがままを忍耐されてこられた神さまもここに至っては、「わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。わたしは彼らを滅ぼし尽くす」と宣言されたのです。これを聞いてモーセはどうしたのでしょうか。モーセは、アロンとイスラエルの民のために、神さまに向かって必死にとりなしの祈りをしたのです。きっとモーセ自身も民に対して怒ったことでしょう。しかし、モーセは懸命に神さまに嘆願したのです。

神さまは、このモーセの祈りを聞き入れて民にくだす災いを思い直されました。しかし、もし本当に神さまが彼らを滅ぼそうとなさったのならすぐに出来たはずですが、なのに、どうしてモーセにそれを告げる必要があったのでしょうか。しかも 10 節で神さまは、モーセがまだ何も言っていないのに「今は、わたしを引き止めるな」と言われているのです。この言葉は、いかにも自分を引き止めてくれることをモーセに期待しているかのようにも思われます。つまり、神さまはここでモーセの説得をむしろ待っておられ、喜んでそれを受けられたのではないのでしょうか。神さまは、ご自分の言うことに従わせることが目的でイスラエルの人々に十戒を与えたわけではありません。神さまが願っているのは、彼らが神さまを信じて生きることです。

神さまは、モーセにただ十戒が記された二枚の板を授けただけではありません。出エジプト記には 25 章から 31 章まで、7 章に渡って幕屋の作り方と礼拝の仕方が記されています。つまり、主なる神さまはイスラエルの民と共に住み、彼らと共に歩もうとしておられたのです。神さまは滅ぼすことを願ってはおられないのです。神さまが願っておられるのは、人々が神に立ち帰って生きることです。背く人々のもとにモーセを遣わされたということは、神さまが彼らを決して見捨ててはおられないということの表われです。

神さまは義なるお方ですから罪をそのままにして見逃すことはできません。けれども、悪人が滅びることも望んでいません。神さまは、モーセのように人々のために執り成す者を望んでおられるのです。神さまはきっと、「モーセよ、よく執り成してくれた」と喜ばれたのではないのでしょうか。エゼキエル書 18 章にはこうあります。「わたしは悪人の死を喜ぶだろうか、と主なる神は言われる。彼がその道から立ち帰ることによって、生きることを喜ばないだろうか」(エゼキエル 18:23)。神さまは悪者の死を望んでいません。むしろその人が悔い改めて生きることを喜ぶお方なのです。さらに続けてエゼキエル書にはこうもあります。「イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ」と主なる神は言われる」(18:30-32)。これが主の御心です。神さまは誰で

あれ「死」を喜ばれません。だから悔い改めて「生きよ」と命じられるのです。

モーセは、この後もイスラエルの民のために神さまに執り成しの祈りをささげます。「今、もしもあなたが彼らの罪をお赦しくださるのであれば……。もし、それがかなわなければ、どうかこのわたしをあなたが書き記された書の中から消し去ってください」（出エジプト 32：32）と。モーセは、民が救われるためには自分が滅んでしまっても構わないとまで思っていたのです。しかも、ただ単に肉体が滅びるというだけでなく、神の書から自分の名が消されても構わない、つまり、彼らの身代わりになって自分が永遠の滅びに落ちても構わないと言うのです。

この執り成しの祈りを文字通り行ってくださったお方を私たちは知っています。イエス・キリストは、ご自分の命をかけて、十字架の上で、自分を迫害し自分を十字架にかけている人のために「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ 23：34）と祈られました。そして、イエス・キリストは、私たち全人類の贖いのために私たちが背負うべき、神から引き離されるという永遠の苦しみを代わりに受けてくださったのです。

今もイエス・キリストは、私たちのためにとりなしの祈りをささげていてくださいます。その祈りがあるからこそ、私たちは、自分の罪の深さを認めつつも神さまの御前に立つことが出来るのです。神さまを「アバ、父よ」と呼ぶことが出来るのです。